

2023年度（令和5年度）

事業報告書

— 2024年6月14日 —

公益財団法人国際高等研究所

2023 年度
事業報告書

— 目 次 —

| | |
|------------------------------|----|
| I. 研究事業活動 | 1 |
| 『1』 新たな研究運営体制の整備 | 1 |
| 『2』 研究事業 | 2 |
| 『3』 交流事業・人材育成事業 | 4 |
| 『4』 成果の発信・広報活動及び他機関との連携 | 10 |
| II. 法人運営 | 12 |
| 『1』 理事長の交代 | 12 |
| 『2』 理化学研究所の退去にともなう予算額減少とその対応 | 12 |
| 『3』 法人運営に係る取り組み | 12 |
| 『4』 資産運用 | 13 |
| III. 2023 年度（令和 5 年度）収支決算 | 14 |
| 『1』 資産運用について | 14 |
| 『2』 貸借対照表 | 14 |
| 『3』 正味財産増減計算書 | 15 |

公益財団法人国際高等研究所
2023年度（令和5年度）事業報告

世界を混乱に巻き込んだ新型コロナウイルス感染症は、未だに完全な終息には至っていないものの、発生から3年を経てようやく社会・経済活動が日常を取り戻す状況になった。

我が国では、2023年5月に、当該感染症の分類指定を従来の2類感染症から、季節性インフルエンザと同様の位置付けである5類感染症に見直し、法律に基づき行政が様々な要請・関与をしていく仕組みから、個人の選択を尊重し、国民の自主的な取り組みをベースとした対応に変わった。

このように新型コロナウイルス感染症を取り巻く状況変化を受け、高等研における事業活動も2023年度上半期からは定常の事業運営方針に戻して進めることとした。

なお、当該コロナ禍において試行的の取り組んできた各種事業へのオンラインを活用した遠隔地からの参加者の確保については、事業範囲の拡大の利点を活かすものと捉え、高等研会場での対面参加及びオンライン参加を同時に受け入れるハイブリッド方式を企画するなど、引き続き有効な試みを継続することとした。

2023年度事業報告は下記のとおりである。

I. 研究事業活動

『1』 新たな研究運営体制の整備

1. 研究運営体制

松本紘所長が、所長の任期満了に基づき2023年4月1日付にて再任されたことを踏まえ、副所長1名及びチーフ・リサーチフェロー2名を委嘱して、新たな研究運営体制を整備した。任期は2023年6月1日から2025年3月31日までの1年10か月。

さらに、若干名の客員研究員及び特任研究員を委嘱した。委嘱期間は1年。

(1) 副所長の委嘱

○小寺 秀俊 京都大学名誉教授・特任教授
大阪大学特任教授
文部科学省技術参与

(2) チーフ・リサーチフェローの委嘱

○有本 建男 政策研究大学院大学客員教授
International Science Council(ISC)フェロー
科学技術振興機構参与

○高見 茂 京都光華女子大学学長
京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

(3) 客員研究員・特任研究員の委嘱

1) 客員研究員 加納 圭 滋賀大学教育学系教授
駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部教授

- 宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
2) 特任研究員 金澤 洋隆 かなざわクリニック医師、市立生駒病院医師
真鍋 公希 中京大学現代社会学部講師
山根 直子 京都大学人文学連携研究者

2. 研究業務連絡会の設置

昨年度まで開催していた月次会議の開催を一旦休止し、6月開催の研究運営会議を経て研究プロジェクトの推進に係る諸課題を審議するため、所長、副所長、チーフ・リサーチフェロー、客員研究員及び連絡会運営事務局をメンバーとする研究業務連絡会を設置して、今年度下半期から開始する自主研究の具体的な推進方策の検討をすることとした。

なお、当該連絡会の開催に併せて、公募研究に係る応募課題の審査会議を開催し、課題採択に向けて協議を行った。

- 研究運営会議：2023年6月25日（日）
- 研究業務連絡会：7月23日（日）
- 研究業務連絡会：8月27日（日）
- 研究業務連絡会：9月16日（土）
- 研究業務連絡会：10月13日（金）
- 研究業務連絡会：11月21日（火）
- 研究業務連絡会：12月16日（土）
- 研究業務連絡会：2024年1月17日（水）
- 研究業務連絡会：2024年3月29日（金）

『2』研究事業

国際高等研究所は、1984年の創設以来、「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」ことを基本理念とし、学問分野の壁を越え研究者が結集して、人類社会が直面する諸課題に関する学際的研究を進めている。学問領域や専門分野のみならず、世代、組織、国籍を越え、研究者が横断的に集い研究を進めるという特徴（Beyond Boundaries）は、今日まで継承されている。

2023年度は、社会にとって望ましい研究所を持続・運営していくための礎を築く1年間とした。新たな研究体制と研究活動の検討期間を経て、本格的活動に移行した。

1. 自主研究

自主研究は、高等研の中核を成す研究である。研究代表者を中心とする研究組織により実施する。研究代表者は高等研が主体的に人選し、高等研の一貫した特徴であるBeyond Boundariesの研究方針を有する研究を実施する。

高等研は、けいはんな学研都市地域という日本が培ってきた歴史、文化、芸術、技能、風土と先端研究とが交差する環境の中にあり、この地域の住人や職業人と物理的にも心情の面でも近い。人間や人々の生活を意識しながら、学術的研究に基づいて、課題の発見から解決までを総合的に取り組むことができる位置にある。自主研究では、このよう

な特徴を生かした研究を行い、地域社会に貢献することを目指す。また、学術研究や社会のあり方を考え、次世代を担う若者が希望を持てる未来社会の実現につながる研究活動を進めることとした。

2023 年度第 1 四半期の検討期間を経て、以下 3 つの自主研究を発足し、研究を推進した。

なお、当該自主研究の実施に係る詳細は、別添の付属明細書 1 を参照のこと。

- ・「科学技術の動向とロボティクスの将来 — ロボティクスと家庭の関係 — 」
研究代表：小寺 秀俊（国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授、大阪大学特任教授、文部科学省技術参与）
- ・「持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究」
研究代表：有本 建男（国際高等研究所チーフリサーチフェロー、科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授）
研究副代表・実行責任者：宮野 公樹（国際高等研究所客員研究員、京都大学学際融合教育研究推進センター准教授）
分野、組織、世代、大学の境界を越えて、研究テーマそのものを深掘りする全国規模の研究ポスター発表大会を企画し、全国を 9 地区に分け開催を計画。2023 年度は第 1 回を広島大学で、2024 年 3 月 3 日（日）～6 日（水）に開催した。
- ・「人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 — 関係性との関連を手がかりに — 」
研究代表：高見 茂（国際高等研究所チーフリサーチフェロー、京都光華女子大学学長、京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授）

2. 公募研究

公募研究は外部の研究者が構想する研究である。その目的は、学術研究の進展に加え、次世代の学術の芽の発掘と育成、若手研究者の支援、研究活動の多様性の確保、研究者ネットワークの醸成への寄与である。また、高等研の事業活動全般の周知の役割も果たすものと捉えている。

対象とする研究は、高等研の「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」という基本理念に照らして相応しく、将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた、学際的な研究とする。例えば「人とはなにか」を問う研究などを含む、文理の境界を越えて根源的な問いに取り組む研究を対象とする。

2023 年度上期に、公募ならびに審査を実施した。公募は、高等研のホームページやメーリングリストを活用し、研究者、大学、研究機関、高等研関係者などに広く周知した。また、公開されている研究公募データベースへの情報掲載を行った。応募数は 36 件であった。その後、公募研究審査委員会を設置し、書類審査と面接審査を経て以下を採択した。採択研究は、2023 年 10 月に始動した。

なお、当該公募研究の推進に係る詳細は、別添の付属明細書 1 を参照のこと。

- ・「グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究」
研究代表：新福 洋子(広島大学副学長・同大学院医系科学研究科教授)

3. 研究企画推進会議

研究企画推進会議は、幅広い学問領域の学識経験者を委員とする。一期は2年間である。2022年度末に第4期が終了したことから、2023年度は、新任1名を含む委員7名に就任していただき、第5期を始動した。2024年2月16日開催の会議において、現行の研究活動や今後の活動計画について報告し、助言をいただいた。これらは、2024年度以降の研究事業を検討する上で重要なものであった。

なお、当該研究企画推進会議に係る詳細は、別添の付属明細書1を参照のこと。

『3』交流事業・人材育成事業

1. エジソンの会

当該プロジェクトについては、未来社会の在り方を想定して、そこから見出される科学・技術・社会の相互作用の重要性を踏まえ、そのための「ネットワーク構築」と「協業を生むための土壌づくり」に主眼をおいた活動を実施している。

2023年度は、前年度に引き続き「未来に向けて取り組むべき研究開発」を年間テーマとして取り上げ、サイエンスの進歩とそれによるテクノロジーの発展を踏まえて、未来社会の在り方を想定して未来を考えた。

新型コロナウイルス感染拡大予防対策を施しつつ高等研レクチャーホールにて原則年間4回（四半期ごと）、対面方式で開催した。開催形式は会場での対面方式を堅持して、クローズな場のメリットを十分に活かした運営を行った。2020年度から中止していた、講師と参加者の対話を主とした情報交換会についても、感染状況を考慮しつつ、第43回から再開した。

なお、当該エジソンの会に係る詳細は、別添の付属明細書2を参照のこと。

(1) オープン・セミナーの開催

1) 第42回：2023年4月6日（水）国際高等研究所レクチャーホール

テーマ：「ビッグデータの活用による社会課題の解決に向けて」

参加者：51名（19機関）

講演：「ビッグデータから社会を予測する ～計算社会科学からのアプローチ～」

講師：笹原 和俊 東京工業大学 環境・社会理工学院 准教授

講演：「データ/アルゴリズムと社会のインターフェースを考える」

講師：江崎 貴裕氏 東京大学 先端科学技術研究センター 特任講師

株式会社 infonerv 取締役

インタラクティブ・セッション

上田 修功「エジソンの会」スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

2) 第43回：2023年8月31日（木）国際高等研究所レクチャーホール

テーマ：「サイバーフィジカルシステム（CPS）の衝撃」

参加者：45名（31機関）

講演：巨大データが創るデジタル技術の新潮流

～LLM (ChatGPT) /ARW (ロボットによる発見支援) /デジタルツイン～

講師：喜連川 優 情報・システム研究機構機構長

講演：「世界に尽くせ～革新的な医薬品の製造開発を通して～」

講師：辛島 正俊 武田薬品工業株式会社ファーマシューティカルサイエンス

サステナビリティ&テクノロジー

インタラクティブ・セッション

上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー

情報交換会

3) 第 44 回：2024 年 1 月 11 日 (木)

主テーマ：「創造力とは何か～未来への新たな扉を開く生成 AI の衝撃～」

参加者：49 名 (25 機関)

講師：岡崎 直観 東京工業大学情報理工学院情報工学系教授

講演：生成 AI は創造の扉を開くのか～大規模言語モデルが生み出す新しい未来～

講師：倉田 岳人 日本アイ・ビー・エム株式会社基礎研究所技術理事

講演：ビジネスのための AI 活用を加速する watson x

インタラクティブ・セッション

上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー

情報交換会

4) 第 45 回：2024 年 3 月 7 日 (木)

主テーマ：「ディープフェイクの衝撃 ～現実と仮想の狭間で～」

参加者：40 名 (23 機関)

講師：越前 功 国立情報学研究所情報社会相関研究系主幹・教授

講演：「インフォデミック時代におけるフェイクメディア克服の最前線

～JST CREST FakeMedia での取り組み～」

講師：山岸 順一 国立情報学研究所コンテンツ科学研究系教授

講演：「音声のディープフェイク検知はどこまで可能か？」

インタラクティブ・セッション

上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー

情報交換会

2. 「ゲートの会」を中核とする「新たな文明」の萌芽、探求を！プロジェクト

当該プロジェクトの活動については、2022 年度に新たに立ち上げたものであり、その趣旨は、従来の「ゲートの会」を基盤として、新たに「meta 鼎談 (哲学×科学×技術)」、更に「市民懇談 (roundtable)」を企画構想し、市民参画の下に人類的課題について考えようとするものである。

具体的には、「ゲートの会」での問題提起を踏まえ、それに続く「meta 鼎談」、「市民懇談」では、専門家と共に、市民をはじめ立地研究機関・企業等の参画の下に、より深く、より多面的に、より広く討議する場を提供するものである。

そこでの討議テーマは、「新たな文明」の萌芽の探求に相応しい文明論的課題とし、2023年度は「文明論」を取り上げて現代的な社会問題をも視野に入れて議論した。

(1) 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

なお、当該プロジェクトに係る詳細は、別添の付属明細書2を参照のこと。

1) 第92回：2023年4月7日（金）

テーマ：「岩倉使節団150年を機に、「日本文明」の再興を考える

—受容する文明から受容ある文明へ—

講師：瀧井一博（国際日本文化研究センター教授）

開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

会場：国際高等研究所 コミュニティーホール

参加者：会場参加22名、オンライン53名、計75名

2) 第93回：2024年1月23日（火）

テーマ：「人類の進化と文明の発達、そして人新世」

講師：長谷川真理子（独立行政法人日本芸術文化振興会理事長・前総合研究大学院大学学長）

開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

会場：国際高等研究所 コミュニティーホール

参加者：会場参加23名、オンライン54名、計77名

(2) 「meta 鼎談（哲学×科学×技術）」

本企画は、『「哲学」なき「科学」／「科学」なき「技術」』、逆に『「技術」なき「科学」／「科学」なき「哲学」』の弊（弊害）について強い問題意識を持って企画構想したものであり、「ゲーテの会」で論じられた課題を踏まえて、「哲学」、「科学」、「技術」の異なる分野の専門家3名を招聘してクロス討議（鼎談）を行い、「新たな文明」の萌芽の探求に繋げていこうとするものである。

この鼎談の参加者には、後に続く「市民懇談」にも対面参加を予定する。参加者には事前に質問事項や討議希望事項などをアンケート調査することで市民参画型の鼎談として開催する。

第2回：2023年6月17日（土）

テーマ：「日本文明」の固有性と普遍性－「近代文明」の限界を超えて

鼎談者：

宗教哲学（思想史）： 末木文美士 国際日本文化研究センター名誉教授

社会科学（国際政治）：三牧 聖子 同志社大学准教授

科学技術（生物学）： 斎藤 成也 国立遺伝学研究所名誉教授

開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

会場：国際高等研究所コミュニティホール

参加者：会場参加26名、オンライン参加37名、計63名

(3) 「市民懇談（roundtable）」

「皆が専門家、皆が素人」のキャッチフレーズの下に、文明論的課題を、住民自身

が能動的、かつ主体的に議論し、「新たな文明」の萌芽を探究しようとするものである。討議項目・内容についても、対面参加者の幾人かの話題提起に基づき、メンターの指導とモデレータの進行の下に議論を進める。討議に参加する対面参加者は「meta 鼎談」の参加者で、「市民懇談」に先立って開催される「ゲーテの会」や「meta 鼎談」の内容を踏まえて、一定の知見をもって参加することを想定する。

第2回：2023年7月15（土）

テーマ：「日本文明」の固有性と普遍性－「近代文明」の限界を超えて」

進行役：本田孝行 科学コミュニケーター

助言者：

末木文美士 国際日本文化研究センター名誉教授

三牧 聖子 同志社大学准教授

斎藤 成也 国立遺伝学研究所名誉教授

開催方式：ハイブリッド（対面・オンライン）方式

会場：国際高等研究所コミュニティーホール

参加者：会場参加13名、オンライン参加37名、計50名

（4）「フォローアップ・ワークショップ（WS）会議」

<『新たな文明』の萌芽、探求を！>プロジェクトの継続性を確保しつつ事業企画を進め、かつ事業効果の最大化を図るためには、当該プロジェクトの「ゲーテの会」・「meta 鼎談」・「市民懇談」の関連性を十分に踏まえ、これら事業の一層の充実に向けて、一体的な観点から事業の企画及び計画を不断に見直すことが必要である。

2023年度においては、当該プロジェクトの持続的開催のための総括的意見・提案を求め、企画内容の充実を図るため、9月28日（木）に「第1回フォローアップ・WS会議」を開催し、主に今期の会合を振り返り、メンバーとの意見交換を行った。

第2回会議は12月8日（金）に開催し、年度内開催を終了した。

（5）市民学習サロン「古典を読む会」

市民学習サロンは、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」、「けいはんな meta 鼎談」、「けいはんな市民懇談」などで取り上げられたテーマに関心を寄せる学生・市民有志が、当該テーマ等について、古典、講演録等をテキストとして、さらに深く自主的にゼミナール形式で学習する学びの場を提供するものである。

2023年度は、「古典（ゲーテ『ファウスト（第2部）』）を読む会」が、年4回（四半期ごと）計画され、それに従って開催された。

第1回 4月15日（土）参加者：6名、テーマ：課題整理

第2回 7月22日（土）参加者：8名、テーマ：産業革命、貨幣発行

第3回 10月14日（土）参加者：6名、テーマ：ホムンクスト

第4回 2024年1月20日（土）参加者：4名、テーマ：産業革命

3. IIAS 塾ジュニアセミナー及び関連事業

本セミナーは、2021 年度から 3 年間の予定で三菱みらい育成財団の助成を受けて実施している。2023 年度は対面方式での開催とした。

なお、当該ジュニアセミナーに係る詳細は、別添の付属明細書 2 を参照のこと。

(1) 2023 年夏季ジュニアセミナー—課題検討型—

開催日：2023 年 8 月 2 日（水）～4 日（金）（2 泊 3 日）

開催方式：対面方式

受講生：16 名（京都府 2 校、大阪府 2 校、奈良県、長野県、岐阜県、和歌山県、兵庫県、広島県、福岡県各 1 校、計 11 校）

基本テキスト：『生命観・死生観を考える』

～科学技術の発展の下での人間の在り方を問う～

講義動画：

①思想・哲学分野

テーマ：「生命とは何か。自然観・生命観、彼我の違いと変遷」

講師：鈴木 晶子 京都大学特任教授

②科学・技術分野

テーマ：「感染症に向き合った日本人、偉大な先人、二人の軌跡」

「(その 1) 天然痘に挑んだ緒方洪庵」

講師：木下 タロウ 大阪大学特任教授

「(その 2) 「病を未発に防ぐ」 予防医学を目指した北里柴三郎」

講師：森 孝之 北里柴三郎記念室臨時職員

体験学習（心身の学）：

テーマ：武道を通じて体得する「もう一つの知、身体知」

—生命活動における客観知と主観知に触れて—

講師：藤原 広臨（京都大学大学院医学研究科 講師）

(2) 2024 年春季ジュニアセミナー—人物学習型—の開催

開催日：2024 年 3 月 23 日（土）～25 日（月）（2 泊 3 日）

開催方式：対面方式

プレミーティング（オンライン方式）：3 月 17 日（日）

受講生：12 名（京都府 1 校、大阪府 1 校、奈良県 3 校、愛知県、長崎県、熊本県各 1 校、計 8 校と 1 大学）

宿泊：国際高等研究所住宅施設

① 思想・哲学分野

テーマ：「本居宣長」に学ぶ

～「もののあわれを知る」と「漢意」、その多様性と先駆性～

講師：田中 康二 皇學館大学文学部

② 政治・経済分野

テーマ：「大河内正敏」に学ぶ

～「科学主義工業」こそ、産学連携「理研モデル」～

講師：斎藤 憲 専修大学名誉教授

③ 科学・技術分野

テーマ：「梅棹忠夫」に学ぶ

～「文明論的」視点を持って物事を考える。「旅」はその基(もと)い～
講師：小長谷 有紀 国立民族学博物館名誉教授
体験学習（心身の学）：
テーマ：茶道を通じて体得する「もう一つの知、身体知」
講師：泉本 宗玄 裏千家 今日庵 業躰 教授方

(3) ホームカミング事業

過去のジュニアセミナー受講生及びティーチングアシスタント（TA）経験者を対象とする「ホームカミング事業」について、第1回を2022年9月17日に実施し、18名（TA3名、社会人2名、大学生9名、高校生4名）の参加を得た。また、その参加者からホームカミング企画会議のメンバーを募り、反省会と3回の企画会議を実施した。

2023年度は、第1回ホームカミング参加者からの有志と特任研究員から構成する企画会議を複数回開催して具体的な計画を立案し、第2回ホームカミングを8月26日に開催した。ここでは、グループごとの討議や全体での意見交換を行った。

第2回：2023年8月26日（土）10:00～18:00

テーマ：「夏目漱石に学ぶ～西欧の模倣（外発的開化）を脱し、主体の確立（内的開化）を～」

参加者：受講生経験者9名、TA（経験者を含む）3名

なお、9月29日（金）には、企画会議メンバーによる反省会を開催し、次年度の企画につなげた。

(4) けいはんな文化学術教育懇談会の開催

IIAS塾「ジュニアセミナー」の企画・実施計画に、教育現場の期待や要請事項を反映させることを目的として意見交換を行うために、「けいはんな文化学術教育懇談会」を国際高等研究所において10月31日（火）10:00～12:00に開催した。

学びで大切なのは、生涯かけて追い求めるような「問い」（テーマ）の発見である、などの貴重な意見交換の場となり、2024年度の各種企画につなげることとした。

4. イベントの動画配信

2020年度の第82回ゲートの会からゲートの会の講師へのインタビューを録画してWebサイトを通じて配信する「ショートインタビュー動画配信」を開始し、これまでに13回の動画配信を行った。

2023年度動画配信：2023年7月7日（金）

講師：瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

テーマ：『岩倉使節団150年』から何を学ぶか（12分20秒）：5月12日開催

<https://www.youtube.com/@user-sq8oy6ww8j/videos>

5. 「大学・研究機関」共創会議と新たな学生向けプログラム

学研都市のみならず、関西全体を視野に入れた更なる交流・連携に向けて、13大学・8研究機関により、けいはんな学研都市「大学・研究機関」共創会議が、2022年12月

にスタートし、次の課題に取り組んでいる。

- ・ けいはんな学研都市の発信力の強化
- ・ 大学・研究機関の交流・連携の推進
- ・ 学研都市で取り組む最先端研究の「見える化」

また、共創会議の議論の中で「若い世代が、将来、幅広い分野で活躍するために、専門分野以外の多様な人材と交流できる場が必要」という意見もあり、高等研が、新たな学生向けプログラム「学生の学生による学生のための教養講座」を企画することとなった。

本プログラムでは、学研都市で取り組む研究テーマの紹介を、企画立案から運営までを学生が中心となり、学生間の交流と主体性を重視した形で実施する。本プログラム実行委員会のメンバーとなる学生は、共創会議参画大学の協力を得て募集し、8大学16名の学生が参加して、高等研において学生のための教養講座実行委員会を開催した。

第1回委員会（キックオフミーティング）：9月12日（火）

第2回委員会：9月27日（水）

第3回委員会：10月30日（月）

第4回委員会：12月4日（月）

第5回委員会：2024年1月22日（月）

第6回委員会：2024年2月21日（水）

第7回委員会：2024年3月4日（月）

なお、「京都スマートシティーエキスポ2023」が2023年10月5日（木）、6日（金）の両日に開催されたのに合わせて、当該共創会議としてブースを設置して、概要展示を行った。

本プログラムの集大成として3月20日（水）に高等研において、ロボティクス、フードテック、ライフサイエンスをテーマに実行委員会の学生が主体となって若い世代に向けた科学イベント「けいはんな科学コレクション」を開催し、中高生を中心に約60名が参加した。

『4』 成果の発信・広報活動及び他機関との連携

高等研の研究活動の成果や存在意義を広く社会に訴求するために発信力の強化に努めることは、公益財団法人である高等研にとって社会から求められる要件でもある。

2023年度においても引き続き、効率的・効果的な広報活動を展開することともに、高等研の事業活動を広範に流布することにより、更なる寄付や外部資金獲得に繋げる努力を行うこととする。

1. 2022年度年次報告書「アニュアルレポート2022」の発行

例年通り2022年度年次報告書「アニュアルレポート2022」を2023年7月に発行した。

発行に際しては、引き続き、記載内容の充実を図る一方で経費削減に繋がるように編集方法及び発行手法の見直しを図った。発行部数は2021年度版と同様に2,500部、送付先は約1,100件とした。

2. 「けいはんな広報ネットワーク企画会議・記者懇談会」参画によるけいはんな学研都市全体の広報活動への貢献

けいはんな学研都市における各立地研究機関が情報交換を通じて広報力を高め、相乗効果を生み出す仕組みとして、広報担当者による「けいはんな広報ネットワーク企画会議」が2016年2月に発足し、原則として毎年2か月に1回の頻度で開催されている。

さらに、立地機関が協力して実施する取り組みとして、学研都市を中心に活動する各新聞社等の報道メディアの記者との意見交換を行う「けいはんな広報ネットワーク記者懇談会」が、企画会議の開催に併せて開催され、この場を記者発表の機会としても捉え、各立地機関からの情報提供に積極的に活用している。

第1回：2023年5月12日（金）於 けいはんなプラザ・ラボ棟

記者懇談会参加メディア：5社6名

第2回：7月12日（水）於 日本ニューロン(株)けいはんなサウスラボ

記者懇談会参加メディア：4社5名

第3回：9月13日（水）於 国際高等研究所コミュニティーホール

記者懇談会参加メディア：5社6名

第4回：11月22日（水）於 国立国会図書館関西館

記者懇談会参加メディア：6社6名

第5回：2024年1月31日（水）於 地球環境産業技術研究所

記者懇談会参加メディア：8社11名（内オンライン参加5名）

また、けいはんな広報スキルアップ研修会が2024年2月14日（水）にけいはんなプラザで開催され、高等研からも当該研修会に参加した。

3. 他機関との連携活動

(1) 「京都スマートシティーエキスポ2023」での高等研ブースの設置

「京都スマートシティーエキスポ2023」が、2023年10月5日（木）、6日（金）に開催された。高等研では、主会場である「けいはんなオープンイノベーションセンター」に高等研ブースを開設し、高等研の概要紹介及び成果物の展示を行った。

(2) 「けいはんな R&D フェア 2023」でのパネル展示

「けいはんなR&Dフェア2023」が、2023年10月6日（金）、7日（土）にけいはんなプラザで開催された。高等研は協賛機関として参加し、高等研の概要紹介等のパネル展示を行った。

(3) 「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式及び「京都環境文化学術フォーラム」における展示連携企画への参加

高等研が主催団体として加わる第14回「KYOTO地球環境の殿堂」表彰式が、2023年11月18日（土）に開催された。これは京都議定書誕生の地・京都から地球環境問題の解決に向けたメッセージを広く世界に発信するために設けられたものである。

高等研は当該表彰式に合わせて開催される「京都環境文化学術フォーラム」において展示連携企画への参加を行った。

4. 2025 大阪・関西万国博覧会とけいはんな学研都市の取り組み

2022 年 5 月に策定された「けいはんな万博全体構想」の実現に向けて、より具体的な事業案を取りまとめて「基本計画」を策定するため、新たに「けいはんな万博準備会」が発足し、第 1 回準備会が 2022 年 10 月 27 日（木）にけいはんなプラザで開催され、準備会会長には松本紘所長が就任した。

なお、「コアイベント」、「オリジナルコンテンツ」、「国際会議」など 6 つの部会を設置して検討を進めることが承認された。高等研は「コアイベント」および「国際会議」の 2 部会に参加することとした。

2023 年度には、第 2 回準備会が 2023 年 4 月 25 日（火）に、第 3 回準備会が 6 月 22 日（木）に開催され、けいはんな万博基本計画の策定について審議された。

また、第 1 回けいはんな万博運営協議会が 11 月 9 日（木）に開催され、共同代表には松本紘所長が就任した。なお、高等研は同協議会の幹事およびサイエンス&アート部会のリーダーとなり、当該事業の具体化を推進することとなった。

5. (仮称) 世界文化フォーラム

京都府が開催を検討しており、ダボス会議の文化版となる(仮称)世界文化フォーラムについて、同府より協力の要請があり、同府が政府に対して同フォーラム開催を提言する建白書の策定について協議を重ねた。

II. 法人運営

『1』 理事長の交代

2018 年より理事長を 5 年務めた森 詳介 公益社団法人関西経済連合会相談役が、2023 年 6 月 6 日付けをもって辞任したことを受け、同日開催の第 92 回評議員会において理事選任が行われた。

その後に開催された第 134 回理事会での代表理事の選任に基づき、上田 輝久 株式会社島津製作所代表取締役会長が新理事長に就任した。新理事長就任により、法人運営に係る新体制がスタートした。

『2』 理化学研究所の退去にともなう予算額減少とその対応

理化学研究所の関西地区研究支援部門が高等研の研究施設「研究棟 B 2 階」に 2017 年 1 月に入居以来、高等研と協働した活動を進めてきたところ、2023 年 8 月を以って退去することとなった。

従って、2023 年度予算額に占める理研による施設使用料収入は、当初予算額 1,925 万円であったところ、収入実績では 820 万円に減少した。年度を通じたこの減収分 1,105 万円を如何に扱うかについて早急な検討が必要となり、9 月及び第 3 四半期以降の支出項目毎の節約等の方策を重ねることで、減収分をほぼカバーできる見通しが立ったため、2023 年度収支予算額の修正決議を経ずして対応することとした。

『3』法人運営に係る取り組み

1. インボイス制度への対応

2023年10月より実施された適格請求書（インボイス）制度に対応した事務処理を実施した。

2022年度に適格請求書発行事業者登録の必要性を調査したところ、高等研は2017年度以降は課税売上が1,000万円を超えているため、2018年度以降は消費税の課税事業者となり、インボイス発行事業者の登録手続きおよび消費税の申告手続きを行う必要があることが判明したことに基づく対応である。

このため、2023年3月13日付でインボイス発行事業者登録申請を行い、4月25日付にて登録を完了した。登録番号はT1130005008355。さらに過年度分（2018年～2021年度）の消費税申告を行った。2022年度消費税申告は2023年5月末日までに行っている。

『4』資産運用

2023年度（令和5年度）資産運用執行状況については、償還された証券について、下記のとおり再運用を行った。

1. 2023年度 再運用（証券購入）額 408,266千円

| 資産運用委員会 | 購入銘柄 | 購入金額 |
|---------------------|--------------------------------|-----------|
| 第63回 (2023.5.8) | iシェアーズ i Boxx ドル建投資 適格社債ETF | 49,998千円 |
| 第64回 (2023.7.5) | みずほFG固定変動利付債3405 | 51,335千円 |
| | モルガンスタンレー社債 | 100,059千円 |
| 第65回 (2024.2.22) | iシェアーズ i Boxx ドル建 好配当株式ETF | 99,991千円 |
| | ベライゾン・コミュニケーション 株式 | 106,883千円 |
| | 小計 | 306,933千円 |
| | 合計 | 408,266千円 |

Ⅲ. 2023年度（令和5年度）収支決算

『1』資産運用について

1. 運用結果

| | 2023年度 | 2022年度 | 増減 |
|--------------|----------|----------|--------|
| 運用資産額 (注) | 3,927百万円 | 3,445百万円 | 482百万円 |
| 運用益 | 129百万円 | 111百万円 | 18百万円 |
| 利回り | 3.3% | 3.2% | 0.1% |

(注) 基本財産と特定資産のうち運用資産の合計

2. 運用資産の構成比率（2024.3.31時点）

| | 金額 (百万円) | 比率 (%) | 備考 |
|-----------|-------------|-----------|--------|
| 国内債券 | 1,040 | 26.5 | |
| 国内株式 | 1,135 | 28.9 | |
| 外国債券 | 1,190 | 30.3 | |
| 外国株式 | 333 | 8.5 | |
| オルタナティブ資産 | 224 | 5.7 | J-REIT |
| 預金 | 5 | 0.1 | |
| 合計 | 3,927 | 100.0 | |

3. 運用資産額の増加

ポートフォリオ構成別の運用資産額の増減は、増加は国内株式 285 百万円、外国債券 131 百万円、外国株式 47 百万円、減少は国内債券 15 百万円、J-REIT 6 百万円である。

また、株価など市場価格の上昇による増加要因が約 360 百万円、為替変動（円安）による増加要因が約 120 百万円である。

4. 運用益の増加

運用益の増加は、日米の金利差を勘案し、比較的利回りの高い外国債券（ドル建て債券）と外国株式（ドル建て株式）の構成比率を増やしたことによる。

『2』貸借対照表

1. 資産の部

資産合計額は 5,236,574 千円で前年比 457,871 千円増加した。

主な要因は基本財産・特定資産等の評価額の増加（478,607千円）、現預金など流動資産の増加（32,893千円）等の資産の増加が、建物および付属設備の減価償却（53,629千円）、研究基金資産取崩し（15,000千円）等の資産の減少を上回ったためである。

2. 特定資産

将来の大規模修繕に備えるために、修繕積立資産として、流動資産の現預金より14百万円の振替を行い、積立金額は24百万円となった。2024年度以降も、継続して修繕積立資金の積立てを目指す。

『3』正味財産増減計算書

1. 経常収益

経常収益は183,136千円で前年比31,626千円増加した。

主な要因は、運用益の増加（18,254千円）、寄付金の増加（6,701千円）、研究基金の取崩しの増加（7,000千円）、過年度分消費税の還付（9,871千円）などの収益の増加が、理化学研究所移転による施設使用料の減少（11,345千円）などの収益の減少を上回ったためである。

2. 経常費用

経常費用は182,344千円で前年比1,503千円増加した。

主な要因は、研究事業・交流事業の強化による委託費増加（1,984千円）などである。

3. 当期経常増減額

経常増減額はプラス1,298千円で前年比30,751千円増加した。

ただし、支出を伴わない減価償却を除いたキャッシュフロー収支はプラス51,567千円である。このうち14,000千円を修繕積立資産として積立てるため、次年度への繰越金は37,567千円増加し、75,455千円となった。

以上

附属明細書 1

公益財団法人国際高等研究所
2023 年度（令和 5 年度）事業活動の展開
研究事業活動

| | |
|---|----------|
| <u>I. 自主研究</u> | <u>1</u> |
| 1. 科学技術の動向とロボティクスの将来 — ロボティクスと家庭の関係 — | 1 |
| 2. 持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究 | 2 |
| 3. 人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 — 関係性との関連を手がかりに — | 3 |
| <u>II. 公募研究</u> | <u>4</u> |
| 1. 研究公募の実施 | 4 |
| 2. グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究 | 5 |
| <u>III. 研究企画推進会議</u> | <u>5</u> |

※本資料の所属・役職は 2023 年 4 月 1 日現在のものである。

I. 自主研究

自主研究は、高等研の中核を成す研究である。研究代表者を中心とする研究組織により実施する。研究代表者は高等研が主体的に人選し、高等研の一貫した特徴である Beyond Boundaries の研究方針を有する研究を実施する。

1. 科学技術の動向とロボティクスの将来 — ロボティクスと家庭の関係 —

(1) 趣旨

けいはんな学研都市がロボットおよびロボティクスの研究開発と事業化の拠点であることから、ロボットとロボティクスさらには、Human Augmentation（人間と技術の一体化による人間の能力の拡張）における研究開発現状を調査するとともに、今後の方向性を議論する。

ロボットおよびロボティクスに関しては京都府による推進計画のヒアリング、ロボティクスに関しては理化学研究所のロボティクス研究等の状況や今後の方向性をヒアリングするとともに、Human Augmentation 技術の今後の方向性とその倫理に関する議論を行い、結果をまとめる。

なお、2025年大阪・関西万国博覧会の開催に併せて、サイドイベントとしてのシンポジウムの開催を検討する。

(2) 研究組織

【研究代表者】小寺 秀俊 国際高等研究所副所長、京都大学名誉教授・特任教授、
大阪大学特任教授、文部科学省技術参与

【顧問】美濃 導彦 京都大学名誉教授、理化学研究所情報統合本部基盤研究開発部門
長・ガーディアンロボットプロジェクト(GRP) プロジェクトリーダー

【主査】中村 泰 理化学研究所情報統合本部 GRP チームリーダー

【メンバー】

齊藤 康己 理化学研究所情報統合本部 GRP 高度研究支援専門職

古川淳一郎 理化学研究所情報統合本部 GRP 研究員

港隆 史 理化学研究所情報統合本部 GRP チームリーダー 他

(3) 活動概要

- ・第1回研究会：2023年12月6日、国際高等研究所にて
コアメンバーによる研究会を開催。今後、参加メンバーの拡大を図ることとした。
- ・第1回ミニシンポジウム「家庭における人とロボットの共生を考える会」

日時：2024年3月18日

場所：国際高等研レクチャーホール、コミュニティホール

テーマ：家庭における人とロボットの共生を考える

— 17年前のユビキタスホームにおける対話ロボット実証実験を振り返って —

内容：家庭内ロボットの研究として先駆的な17年前の「ゆかりプロジェクト」。その主要メンバー3名による講演と鼎談を実施した。

「ゆかりプロジェクト」は、ネットワークと小型（身長25cm）の子供をイメージした対話ロボット Phyno（フィノ）を接続する事により、日常生活における

人間の活動を支援することを試みた実証実験であった。Phyno が仲介するネットワーク環境が装備された住宅で、構成の異なる 4 家族がそれぞれ 2 週間ずつ生活するという大がかりな実験であった。当時の研究活動を振り返り、現在の技術的な飛躍を踏まえ、今後の研究の方向性などについて議論を行った。

プログラム：Part1 講演、Part2 鼎談、Part3 質疑応答、Part4 意見交換会

登壇者：美濃 導彦先生（理研 GRP プロジェクトリーダー）

山崎 達也先生（新潟大学教育研究院自然科学系教授）

上田 博唯先生（京都大学学術メディアセンター客員教授）

司会：小寺副所長

2. 持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究

(1) 趣旨

学問領域や分野、世代、大学の境界を越えて、研究テーマそのものを深掘りする全国規模の研究ポスター発表大会を実施する。全国を 9 地区に分け、各地区における幹事校を拠点に、その地区の研究者からなる 100 人規模の大会とする。

単に多様な学術分野が集まった発表ではなく、越境の工夫や、本音で対話できる仕組みを導入することで、自身の研究を深く問う場となることをねらう。共同研究の創出による研究テーマや内容の進展のみならず、研究者個々人の研究精神の深化を起し、さらにそれを全国規模で展開することで、我が国の学術界の基盤と文化の醸成を目指す。

(2) 研究組織

【研究代表者】有本 建男 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、
科学技術振興機構参与、政策研究大学院大学客員教授

【研究副代表・実行責任者】

宮野 公樹 国際高等研究所客員研究員、
京都大学学際融合教育研究推進センター准教授

[メンバー]

上野 ふき 大阪大学基礎工学研究科システム創成専攻知能ロボット学研究室特任助教

中山 俊秀 東京外国語大学副学長、同大アジア・アフリカ言語文化研究所教授、同大学際研究共創センター長

矢代 真也 編集者、合同会社 SYYS 代表

渡辺 彩加 京都大学大学院総合生存学館（思修館）5 年一貫制博士課程 5 回生

(3) 活動概要

・研究参加者によるミーティング：月に数回、オンラインにて開催

・全国キャラバン 3Questions 第 1 回

日時：2024 年 3 月 3 日～6 日

場所：広島大学東千田キャンパス地域連携フロア SENDA LAB

内容：全国キャラバン 3Questions は、関係大学 URA 組織の協力・企業の寄付（グ

リコ、サントリー、メルカリなど）・クラウドファンディングの支援を受けて、研究者の分野・組織を越えた学際共創ネットワークをボトムアップで全国に拡大するプロジェクトである。毎日新聞、日経新聞、中国新聞などの後援を得ている。

全国キャラバン 3Questions 実施予定 9 地区のうち、初回を中国地区にて、幹事校広島大学の支援を受けて実施した。ポスター発表は 56 件、参加者のべ 256 人。会場では、「いま追いかけているテーマ／その展望／社会への問いかけ」の 3Questions を表現した 56 枚のポスターの展示、参加者のコメント記入、4 テーマ（「都市」「循環」「利己的行動」「創造性」）に係るグループセッション、参加研究者・市民・支援企業などによる具体的課題について意見交換を実施。これらを通じて、今後のボトムアップによるテーマ設定の方法、学際共創のあり方、産学連携、資金調達の方法などについて将来展開に向けた知見を得た。

今後は、開催展示、コメント記入、グループセッションの方法の改良、異分野の研究者の架橋方法などを蓄積・修正しながら、類似の取り組みを進めているグループとの連携も図り、全国展開の基盤を作っていくこととしている。

※新聞記事は「参考」に掲載。

3. 人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 — 関係性との関連を手がかりに —

(1) 趣旨

健康や幸せを実現している人々に共通する要素として、「関係性」の存在（良好な人間関係、何等かのつながりの感覚）が指摘されている。予防医学等の観点からは、健康には「食事」「運動」の他に、「意識」が重要であるとされている。また、世界幸福度ランキングにおいても、「意識」と幸福度の関連が見てとれる。

そこで本研究では、健康と幸せを実現する「意識」をテーマとする。特に病気が劇的に寛解した事例に着目し、事例群に共通してみられる意識の傾向や要素の抽出を試みる。けいはんな学研都市地域住民の幸福度向上の手立ての一つとして、人を健康と幸せに導く「意識」を明らかにし、「先端幸福創造都市けいはんな」の実現に貢献することを目指す。

(2) 研究組織

【研究代表者】高見 茂 国際高等研究所チーフリサーチフェロー、
京都光華女子大学学長、
京都大学学際融合教育研究推進センター特任教授

[メンバー]

秋山 知宏 神戸情報大学院大学情報技術研究科客員教授、
京都光華女子大学研究職員
川上 浩司 京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康解析学
講座教授
木下翔太郎 慶應義塾大学医学部ヒルズ未来予防医療・ウェルネス共同
研究講座特任助教
高松 邦彦 東京工業大学企画本部マネジメント教授
高見 佐知 京都大学学際融合教育研究推進センター特任研究員

(3) 活動概要

- ・第1回研究会：2023年10月9日、オンライン、研究の具体的進め方に係る議論
- ・第2回研究会：2024年2月9日、オンライン、研究の具体的進め方に係る議論
- ・第3回研究会：2024年3月21日、オンライン、医師島袋隆氏による講演「癌と向き合っただけで分かったこと」の後、意見交換を実施。

II. 公募研究

公募研究は外部の研究者が構想する研究である。

1. 研究公募の実施

(1) 研究公募の概要

・趣旨

学術研究の進展に加え、次世代の学術の芽の発掘と育成、若手研究者の支援、研究活動の多様性の確保、研究者ネットワークの醸成への寄与を目的とする。

・対象とする研究

①高等研の「人類の未来と幸福のために何を研究するかを研究する」という基本理念に照らして相応しい研究

②将来新しい学術を切り拓く可能性を秘めた学際的な研究

③文理の境界を越えて根源的な問いに取り組む研究、例えば「人とはなにか」を問う

研究等

・研究期間・研究費

2023年10月1日から2年間、1件上限300万/2年間

・応募件数・採択件数

応募36件、採択1件

(2) 実施経緯

・募集

2023年4月14日～6月9日：応募数36件

周知先：HP、メーリングリスト(4000箇所)、関係先郵送(1000箇所)、公募データベース

・書類審査

7月23日：審査委員会各委員の評価結果に基づく合議

委員：松本所長(委員長)、小寺副所長、有本CRF、高見CRF、加藤専務理事

・面接審査

8月27日：対面実施、2件の研究代表者に対し追加ヒアリングを実施

審査者：審査委員会委員

・最終決定

9月16日：審査会議

新福洋子氏提案の研究を採択することに決定、高等研ホームページに結果を公表

2. 採択研究：グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究

(1) 趣旨

分野横断的な若手・中堅の研究者ネットワークを形成し、分配的正義の観点から、より包括的で公平、かつ平等な科学システムと科学者の役割を検討する。また、未来に続く若手世代がそうした議論に参加し、国際的な活動のスキルを向上することを目的とする。

具体的には、分配的正義、科学ディアスポラ、科学技術外交、特に現存する国際団体の役割に関する最近の動向について、文献調査、国際会議の参加者からの聞き取りによる調査を行う。また、国際会議に合わせてイベントを組み、議論を展開する。それらの議論の結果を積み上げ、論文として発表する。プロジェクトの終盤には、この活動を継続するために必要な組織体制を構築すべく、ネットワーク内にて協議を行う。

(2) 研究組織

【研究代表者】新福 洋子 広島大学副学長・同大学院医系科学研究科教授

【メンバー】

隠岐さや香 東京大学大学院教育学研究科教授

狩野 光伸 岡山大学 学術研究院ヘルスシステム統合科学学域教授

近藤 康久 総合地球環境学研究所准教授

坂元 晴香 東京女子医科大学准教授

標葉 隆馬 大阪大学社会技術共創研究センター准教授

(3) 活動概要

外部有識者へのヒアリングの実施

・第1回

目的：Planetary Health と分配的正義に関するヒアリング

日時：12月4日(月) 13:00-14:00 (オンライン)

ヒアリング対象者：鹿島小緒里先生 (広島大学 IDEC 国際連携機構 PHIS 准教授)

・第2回

目的：災害看護に関するヒアリング

日時：2024年3月20日(水) 9:00-10:30 (オンライン)

ヒアリング対象者：神原咲子先生 (神戸市看護大学基盤看護学災害看護・国際看護学教授)

Ⅲ. 研究企画推進会議

(1) 目的

研究活動に係る諸課題に関する所長の諮問に応じた検討、所長への建議あるいは助言・提案、研究事業の企画及び円滑な推進を図るために必要な事項を検討する。

(2) 委員

2015年度に発足、一期2年、2023年度に第5期を迎えた。人文学、社会科学、自然科学

学などの分野から、幅広い学問領域の学識経験者を委員とする。

[議長] 榊 裕之 国立大学法人奈良国立大学機構理事長、学校法人トヨタ学園フェロー、豊田工業大学名誉学長、東京大学名誉教授

[委員] 稲賀 繁美 京都精華大学国際文化学部特任教授、放送大学科目主任・客員教授、国際日本文化研究センター名誉教授、総合研究大学院大学名誉教授

小谷 元子 東北大学理事・副学長

高橋 義人 平安女学院大学国際観光学部特任教授、京都大学名誉教授

中村 道治 科学技術振興機構名誉理事長

西尾章治郎 大阪大学総長

吉川左紀子 京都芸術大学学長・同大学文明哲学研究所所長、京都大学ワールド科学教育研究センター特任教授、京都大学名誉教授

(3) 会議開催

日時：2024年2月16日

場所：国際高等研究所 ※オンライン併用

内容：現行の研究活動や今度の活動計画について報告し、助言をいただいた。

(4) 主な意見

1) 自主研究

【科学技術の動向とロボティクスの将来 — ロボティクスと家庭の関係 — 】

- ① ロボティクスは、AIの要素が入り様変わりをする部分と、災害等で役立つオリジナルな部分とがあろう。その両面から社会への貢献が期待されている。
- ② 人間の能力を拡張するとはどういうことなのか。コミュニケーション能力など、人間が本来持っている能力の軽視や劣化を招かないよう、高等研で議論すべきことが数多くあるテーマである。

【持続可能でレジリエントな社会実現に向けた学際共創の方法の開発と実践研究】

- ③ 大学や研究所の研究者、特に若手は、大変忙しく、横のつながりを持つ機会がなかなか持てない。全国キャラバン3Questionsは一つのモデルとなろう。
違う世界を知ることは非常に重要で、将来まで続く交流も生まれる。学术界のみならず産業界にも広げてほしい。
- ④ 我々はどうしても、重要な問題は、社会・国・世界などの視点から考えがちだ。それはもちろん大事なことであるが、一方で、個人や地域の人々の歴史・文化・慣習・価値観などの視点から考えることも大事である。しかしそれを後回しにしがちだ。全国キャラバン3Questionsは、統計的に多数派でない視点を含む研究課題に光りをあてるという点においても、重要な試みである。

【人を健康と幸せに導く「意識」に関する研究 — 関係性との関連を手がかりに —】

- ⑤ 人間の意識や幸福感をどう科学的に捉えるか。興味深いテーマである。
- ⑥ 「意識」という言葉の定義が、研究者によって異なる。英語圏の文献などを読んでみると、それが顕著である。しかし例えば、仏教は「意識」に深い理解がある。こういったものをどう取り込んでいくか。

2) 公募研究

【グローバルな分配的正義を促進する科学システムと科学者の役割に関する研究】

- ① 世界のネットワークを駆使して国際的な視点で研究をしている。高等研の国際性発揮の実例として重要である。
- ② 紛争や感染症という昨今の世界の動きの中で、分配的正義をテーマにすることは非常に重要である。
- ③ 分配的正義を促進するのは、科学者や科学システムだけであろうか。科学者にできることは全体の中の部分であり、科学者が多くを担えるわけではない。そのような認識の上に立ち、課題を絞って研究を進めることが大切であろう。

3) 研究全体

- ① 昨今、学問は細分化・専門化が進み、研究者の研鑽が深まると本人は充足しても、周囲は理解できない領域に入る。周囲とは、社会であったり、他の研究分野であったりする。研究者は常に、その両方向性と対峙することになる。
- ② 研究分野・領域を越えた本当の議論が必要である。本来大学は議論の最も適切な場であるはずだが、昨今は論文作成や研究費獲得を優先せざるを得ない状況であり、「本当の議論」はなかなか実現できない。
- ③ 学問が社会のインフラとなるにはどうしたらよいのか。個々の研究の集合に留まらず、それらが相互に繋がり、社会の将来の姿を探ったり、社会に何等かの貢献をしたりするのは、どういうことか。
- ④ 高等研の自主研究や公募研究は、こういった問題への取り組みを試みている点において共通であり、横断性がある。その横断性を十分に活用して、それぞれが深まるような方向に進めていってほしい。

4) 新たな研究員制度

- ① 人間は生涯勉強をする。特別研究員制度は学問や文化を軽視しがちな昨今の日本の情勢に一石を投じるであろう。
- ② 海外では定年の無い大学が多く、研究力次第で研究を継続できる。日本もそうなることを願っていた。研究継続を実現する特別研究員制度は重要である。
- ③ 白眉研究者と特別研究員、若手と経験豊かな人との世代を越えた議論から、新たな研究が生まれる可能性がある。
- ④ 世代を越えた対話、特に経験や失敗談を年長者から若手に伝えることは、若手にとって人生の糧になる。
- ⑤ 高等研に滞在できることは大きな利点であり、新たな研究員制度においてもこの点を活用したいところである。

以上

付属明細書 2

公益財団法人国際高等研究所
2023 年度（令和 5 年度）事業活動の展開
交流事業活動

| | |
|-------------------------------------|-----------|
| <u>I. 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト</u> | <u>2</u> |
| <u>II. 『エジソンの会』</u> | <u>4</u> |
| <u>III. けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』</u> | <u>6</u> |
| <u>IV. IAS 塾『ジュニアセミナー』</u> | <u>11</u> |

I 『集合知ネットワーク』（きづ会議）構築プロジェクト」

地震や降雨災害等の自然災害、ウクライナ侵攻や中東問題など、世界各国において予想できない事象が絶え間なく起こり続けてきている。交通網の発展やIT技術の発達に伴い、社会の多様化も極度に進み、社会の在り方の変化のスピードもヒトの脳力を超えたものとなっている。こういった状況のなか、質の高い情報を、スピード感を持って活用していくために、常に様々な事象に対して積極的態で議論し、思考しておくことにより「構え」をとっておくことが有用である。本活動は「何を研究するかを研究する」研究所として行うべき活動を行い、近い将来国際高等研究所が執るべき活動の在り方を示す。

(1) 研究目的と方法

ウクライナ侵攻や中東問題、COVID-19等の感染症、情勢不安からくる経済状況の悪化など様々な困難が次々と押し寄せ、先が見通せない現在。これらの課題を人類が一丸となって乗り越えるためには、様々な課題について日常的に議論を続けておく必要がある。そこで、本事業ではコロナ禍以前からオンライン会合を進めてきており、これまで46回にわたって会合を持ってきた。更にサイエンスアゴラ等の場を利用し、専門を超えた各会議体にお集まりいただき議論を進めてきた。その中で多くのアイデアやヴィジョナリーな思考が展開され、これらを形にするような活動も散見された。サイエンスアゴラのような年に1度の集まりでなく、議論する機会を増やし、けいはんな大学（仮）のようなネットワークを広げることで、様々な知見を組み合わせ、よりよい解決の糸口を素早く見出すことができる「構え」の醸成をはかっていく。本事業により国内外の人的ネットワークの核に当たる部分の構築を行い、知恵の深化を目指す。

(2) 2023 年度実績報告

ウクライナや中東における戦争、我々の社会の中にも深く根付いている不寛容...目に見えない大きな問題が様々な形で混乱をもたらしている。様々なゲストをお迎えし、なぜ現在の状況に至ったのか、今後どのようになってゆくのか等についてシコウし、意見交換を行った。自らの死生観をもとにアート活動を行われているアーティストの方にもお越しいただいた際には、命のありがたや大切さ、重さをまざまざと見せつけられ、改めて積極的に活動する重要性を突き付けられた。これらの活動を基盤とし、けいはんなエリアが様々な想いが交差し、アイデアが形になっていくエリアとして展開できるよう進めていく。

(3) 研究会開催実績

第1回（通算第41回）研究会：4月25日（火）

第2回（通算第42回）研究会：5月30日（火）

第3回（通算第43回）研究会：6月27日（火）

第4回（通算第44回）研究会：7月25日（火）

サイエンスアゴラ：11月5日（日）日本学術会議、JAAS、サイエンストークス、ニコニコ学会β、UoUの関係者、代表者にご参集いただき、連携の価値と方向につ

いて議論

第5回（通算第45回）研究会：1月9日（火）

第6回（通算第46回）研究会：3月25日（月）

（4）ゲストスピーカーとテーマ

第1回研究会：杉谷直哉（在野研究者）「近代地方政治について」

第2回研究会：松嶺貴幸（アーティスト）「自身の死生観をもとに」体調不良のため延期 参加者によるフリーディスカッション

第3回研究会：松嶺貴幸（アーティスト）「自身の死生観をもとに」

第4回研究会：酒井敏（静岡県立大）「社会に遊びを」

第5回研究会：駒井章治（国際高等研究所）「けいはんな大学（仮）について」

第6回研究会：柴藤亮介（アカデミスト）「研究や学問の価値を今一度問い直す」

（5）研究組織

【研究代表者】

駒井 章治 東京国際工科専門職大学工科学部情報工学科教授
国際高等研究所客員研究員

【研究参加者】

宮野 公樹 京都大学学際融合教育研究推進センター准教授
国際高等研究所客員研究員

杉谷 和哉 岩手県立大学総合政策学部講師
国際高等研究所特任研究員

井出 和希 大阪大学感染症総合教育研究拠点特任准教授

中村 征樹 大阪大学全学教育推進機構教授

定藤 博子 摂南大学経済学部准教授

久木田水生 名古屋大学大学院情報科学研究科准教授

安藤 悠太 京都大学大学院地球環境学堂特定研究員

阪井 英隆 パナソニック株式会社

西村 準吉 佼成学園女子中学高等学校

森本 智史 慶應義塾大学先端研究センター特任助教

田島 知之 京都大学宇宙総合学研究ユニット特定助教

（6）今後期待される成果

多様な専門性を持つ学者、企業人、芸術家、官僚等の知を集結することで知的好奇心を刺激できる「場」を設定する。これにより、未来を積極的に拓くヴィジョナリーな知恵の「核」の構築を行う。ここから様々なアイデアが生まれ、それぞれの形で社会実装されることが期待される。様々な題材を意識することによって見えない未来に即座に対応でき、かつ創造的な具体を発出できるような会議体の構築を目指し、そのあり方を探る。このようなネットワーク構築のノウハウそのものが未来に引き継がれるものと期待する。

II 「エジソンの会」

エジソンの会は、けいはんな学研都市が標榜する「立地機関間の連携とそれによる成果の創出」を促進するために、高等研が知的ハブとしての役割を果たし、立地機関の研究者や技術者のコミュニティーを形成し、具体的な「オープンイノベーション」の成功事例の確立に寄与することを目的として発足したものである。2023 年度も昨年度に引き続きオープンセミナーの開催を重点的に事業展開した。

【オープンセミナー】

(1) 第 42 回：4 月 26 日（水）14:00～17:30 国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「ビッグデータの活用による社会課題の解決に向けて」

趣旨：「計算社会科学」は、「人文・社会科学」と「情報科学」の学問の融合により新たに拓かれた研究領域である。研究者は人間行動や社会現象などの複雑な事象を定量的に捉え、モデル化とシミュレーションを通して「未来を予測」し、「社会課題の解決」に取り組んでいる。これまで捉えることのできなかつた多種多様なビッグデータを有効に活用し、多岐にわたる領域融合の視点から、産官学の連携や共同研究により多くの成果が生み出されており、今後の展望を含め社会問題の解決に益々の期待が高まる会合となった。

参加者：51 名（19 機関）

講演：「ビッグデータから社会を予測する～計算社会科学からのアプローチ～」

講師：笹原 和俊 東京工業大学 環境・社会理工学院 准教授

講演：「データ/アルゴリズムと社会のインターフェースを考える」

講師：江崎 貴裕 東京大学 先端科学技術研究センター 特任講師

株式会社 infonerv 取締役

インタラクティブ・セッション

上田 修功「エジソンの会」スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

(2) 第 43 回：8 月 31 日（木）14:00～17:30 国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「サイバーフィジカルシステム（CPS）の衝撃」

趣旨：科学技術の進展により、膨大なデータ自身がドライビングフォースとなり、デジタル空間と現実空間の連携が今後も益々進むものとなる。科学技術の進歩を促進するための「オープンサイエンス」への取組みや、直前に開催された G7 サミットでの IT に関わる注目のポイント等、数々の事例を通して説明頂いた。また、医薬品業界での創薬の全工程を通じた最新技術の活用事例を解説頂いた。CPS を通して、AI と人との役割の再定義やイノベーションの在り方、教育制度の問題点、また日本製のコロナワクチン開発の出遅れた経緯や企業間のデータシェアリングの難しさなど、日本の医療分野の各種問題点があぶり出され、多様な側面から活発な意見交換が行われた。

参加者：45 名（31 機関）

講師：喜連川 優 情報・システム研究機構 機構長

講演：「巨大データが創るデジタル技術の新潮流

～LLM (ChatGPT) /ARW (ロボットによる発見支援) /デジタルツイン～」

講師：辛島 正俊 武田薬品工業株式会社ファーマシューティカルサイエンス

サステナビリティ&テクノロジー イノベーション ヘッド

講演：「世界に尽くせ～革新的な医薬品の製造開発を通して～」

インタラクティブ・セッション

上田 修功「エジソンの会」スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

情報交換会

(3) 第 44 回：2024 年 1 月 11 日 (木) 14:00～18:00

国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「創造力とは何か～未来への新たな扉を開く生成 AI の衝撃～」

趣旨：2022 年 11 月にリリースされ、短期間の内に爆発的なユーザーを獲得した ChatGPT を取り上げ、LLM (大規模言語モデル) を中心とした生成 AI の最新状況と日本語大規模言語モデル (通称 Swallow) の研究開発を説明頂いた。基盤モデルの活用面での可能性に加え、生成 AI がもたらす「負の側面」や課題についても説明頂いた。質疑応答では、生成 AI の研究開発への投資額の内外格差や国内の AI 人材の不足と海外流出への懸念、AI の説明責任の問題、日本語 LLM の国内での連携や統合の可能性、昨今の学術論文の傾向に見られる生成 AI の影響など、AI の進化に関わる本質的な疑問や問題点が取り上げられた。

参加者：49 名 (25 機関)

講師：岡崎 直観 東京工業大学情報理工学院情報工学系 教授

講演：「生成 AI は創造の扉を開くのか

～大規模言語モデルが生み出す新しい未来～」

講師：倉田 岳人 日本アイ・ビー・エム株式会社基礎研究所 技術理事

講演：「ビジネスのための AI 活用を加速する watson x」

インタラクティブ・セッション

上田 修功「エジソンの会」スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

情報交換会

(4) 第 45 回：2024 年 3 月 7 日 (木) 14:00～18:00 国際高等研究所レクチャーホール

主テーマ：「ディープフェイクの衝撃 ～現実と仮想の狭間で～」

趣旨：メディアや SNS 等でフェイクニュースが頻発し、社会問題化している今日の状況を踏まえ、今回のテーマを取り上げた。画像や動画の具体的事例によりフェイクの生成技術の特長や検知手法の事例、および新たな発想での検知への取り組みなど、多くの具体的な事例を通して生成技術の最新状況と社会への影響を説明頂いた。また、EU と米国の法規制の現状や日本政府の動き、サイバーワクチンや透かし技術の有効性、企業のメディアリテラシー、フェイク防御にかける学術界の想い、デジ

タル世界における倫理観や若者への教育のあり方など、多くの議論がなされた。技術オリエンテッドではなく、情報の受発信者相互の「トラスト（信頼）」を社会の中でどう築いて行くことができるのか、今後も十分に議論を高めていく必要があることを再認識した会合であった。

参加者：40名（23機関）

講師：越前 功 国立情報学研究所情報社会相関研究系 主幹・教授

講演：「インフォデミック時代におけるフェイクメディア克服の最前線

～JST CREST FakeMediaでの取り組み～」

講師：山岸 順一 国立情報学研究所コンテンツ科学研究系 教授

講演：「音声のディープフェイク検知はどこまで可能か？」

インタラクティブ・セッション

上田 修功 エジソンの会スーパーバイザー

理化学研究所革新知能統合研究センター副センター長

情報交換会

Ⅲ 「ゲーテの会」を中核とするプロジェクト

「ゲーテの会」を中核とする<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトについては、2022年度に新たに起ち上げたものである。従来の「ゲーテの会」を基盤とし、新たに「けいはんな meta 鼎談（哲学×科学×技術）」、更に「けいはんな市民懇談（roundtable）」を企画構想することにより、市民参画の下に人類的課題に立ち向かうこととした。

具体的には、年度ごとにテーマを定め、「ゲーテの会」での問題提起を踏まえ、それに続く「meta 鼎談」「市民懇談」では、専門家と共に、市民を初め立地研究機関・企業等の参画の下に、より深く、より多面的に、そしてより広く討議する場を提供するものである。

さらに、これらの議論を「IIAS 塾ジュニアセミナー」、あるいは市民の学びの場に繋げて、事業の構造化を図ることで、市民的関心の高い文明論的課題について統一感をもって深く、広く、そして多面的に議論でき、問題の提起から社会への還元までを完結させるプロジェクトとして推進していく。

本プロジェクトを構成する各取組の内容は、次のとおりである。

(1) 満月の夜開くけいはんな哲学カフェ「ゲーテの会」

けいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生など対象として、文明論的課題やそれに関わる人物に関して第一人者をお招きし、対話型講演会を開催する。

(2) 「けいはんな meta 鼎談（哲学×科学×技術）」

文明論的課題について、哲学・芸術・宗教／人文・社会・自然科学／科学技術・社会技術の異なる分野の専門家による鼎談を企画し、より深く、より多面的に議論する。

(3) 「けいはんな市民懇談 (roundtable)」

「ゲーテの会」及び「meta 鼎談」の内容を踏まえて、けいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生などの参加を得て開催し、市民の自学自習へとつなげる。

○「市民懇談」等フォローアップ・ワークショップ会合：2回開催した。

第1回：9月28日（木）18:00～20:00 於国際高等研究所

第2回：12月8日（金）18:00～19:30 於けいはんなプラザ

(1) 「けいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」

2013年8月に有志の企画で発足し、2013年12月開催の第5回から高等研の正式な交流事業と位置付けて原則として毎月開催してきた。2023年度末までに93回の開催実績を重ねるに至っており、高等研が関西文化学術研究都市の中核機関として、相互の連携や知的活動、さらには参加者相互の人脈構築や交流の中心的役割を担うという「知的ハブ」機能を果たす催事に育ってきている。

2013年の「ゲーテの会」発足以来、概ね2年間を1ステージとして主テーマを掲げて事業を展開してきた。第1ステージは「経済至上主義、科学技術至上主義からの脱却を求めて。」とし、第2ステージは「日本の未来を拓くよすが（抛）を求めて。」、続く第3ステージは「未来に向かう人類の英知を探る。」であった。2019年度からは第4ステージとし、「『新しい文明』の萌芽を探る」をテーマにして実施してきた。

2021年度からは新型コロナ禍の影響下にあって、オンライン方式と対面方式を併用するハイブリッド方式で開催しており、より広い地域、より多くの参加希望者に貴重な学びの機会を提供することができ、参加者にも好評である。

<2023年度事業の取り組み>

2023年度の<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの統一テーマ「文明論」を念頭に、具体的なテーマ人物を特定し、そのテーマ人物にふさわしい講演者を選定した。

開催案内対象者は、これまでどおりのけいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生などに加えて、各地での高等研のイベント参加者も対象とし、対話型講演会として開催した。また、引き続き、参加者の全国展開を図るため、オンライン開催と対面方式によるハイブリッド開催とした。

2023年度活動実績：

第92回：5月12日（金）18:00～20:00 オンライン併用ハイブリッド開催

分野：思想・文学分野

テーマ：岩倉使節団15年を機に「日本文明」の再興を考える

—受容する文明から需要ある文明へ—

趣旨：今年の「岩倉使節団150年」、2018年の「明治維新150年」とともに、国民的盛り上がりは見られない。「失われた30年」の最中であって心理的距離が生じて、今や「明治」への賛美は、過去のものとなった感がある。2020年の「議会制度130年」も日本では全く注目されなかったが、発展途上国などでの注目

度は高く、国際会議も開かれ、日本の議会制度導入の経験は人類史的意義があると評価されている。

日本は、世界に類例を見ないほど、ものの見事に近代国家（中央集権国家）へと脱皮した成功体験が、今や、日本の発展のネックとなっているのではないか。ハンティントン『文明の衝突』で、日本を「一文明一国家」として描き、グローバル化の中で孤立し、そのプレゼンスを失うであろうと指摘しており、この「ハンティントンの罠」を如何に回避するかが課題となっている。

今、第二の「岩倉使節団」を派遣するなら、国際社会が求めているニーズ、日本が貢献できるシーズ、現代の日本のあるべき姿の探究が必要であり、日本の進むべき道として「受容する文明から需要ある文明」を提言された。

質疑応答では、日本のアニメなどに描かれている自然観、人生観、世界観が世界の注目の的であること、これからの日本の真の国際貢献は、「絶対善」を前提とする「キリスト教的」世界観と対照的な、日本人の心性（「善・悪」の相対化）を基礎とした世界観を根底に据えるべきではないかなど、示唆に富んだ意見交換が交わされた。

講師：瀧井 一博 国際日本文化研究センター教授

参加者：会場参加者 22 名、オンライン参加者 53 名、計 75 名

第93回：2024年1月23日（火）18:00～20:00 オンライン併用ハイブリッド開催

分野：科学・技術分野

テーマ：人類の進化から見たヒトの文明と「人新世」

趣旨：アフリカなどでのフィールドワークの過程で、人間そのものに関心が向

き、人類（脳を含む身体）とその文化（心を含む環境）の相互進化と変容、その機序について研究を重ね、「ヒト」の本質的性向を探求してきたという、ご自身の経歴の紹介から始まった。人類は集団行動での協力と競争、共同繁殖などを通じて、物理的、生物的な知能だけでなく社会的な知能（共感・言語）の発達から、特徴的な「大きな脳」を獲得した。そして、狩猟採集社会、農業社会への変化に適応してきたが、「産業革命」を機に人口の激増、経済の急拡大、地球環境の激変により、1950年頃を境とする「人新世」を迎えている。さらに情報社会が人類の脳機能に変化をもたらし、人の本性も変化して「新・人類」が誕生した。これからの「人新世」を生きる「新・人類」は、如何なる文明世界を構築していくかに想いを馳せる講演であった。

質疑応答では、人類の進化と、個人主義・民主主義などの人間社会の発展との相関。脳の巨大化による多機能化と、その機能の可塑性の下での代替機能の発現による環境適応。脳機能の外部化（生成 AI・chat GPT 利用など）による人類の発展の可能性、あるいはその不可能性などについて、活発な意見交換が行われた。

講師：長谷川真理子 独立行政法人日本芸術文化振興会理事長
前総合研究大学院大学学長

参加者：会場参加者 23 名、オンライン参加者 54 名、計 77 名

(2) 「meta 鼎談 (哲学×科学×技術)」

2022年度から新たに起こした<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの中心となる取組みである。その趣旨は『「哲学」なき「科学」／「科学」なき「技術」』、逆に『「技術」なき「科学」／「科学」なき「哲学」』の弊について、強い問題意識を持って企画構想したものであり、「ゲーテの会」で論じられた課題を踏まえて、「哲学」「科学」「技術」の異なる分野の専門家3名を招聘してクロス討議(鼎談)をしていただき、「新たな文明」の萌芽の探求に繋げていこうとするものである。

この鼎談の参加者には、後に続く「市民懇談」の対面参加予定である、けいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生などを招くとともに、予め、質問事項、討議希望事項などをお聞きし、市民参画型の鼎談として開催するものである。鼎談の様子は zoom ウェビナーにより事前登録者にオンラインで全国配信し、広く視聴して頂いている。

<2023年度事業の取り組み>

2023年度の<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの統一テーマ「文明論」を踏まえて、モチーフとして『「日本文明」の固有性と普遍性 — 「近代文明」の限界を超えて』を掲げ、仏教学や日本宗教史に通じておられる宗教哲学分野の先生、国際関係論、平和研究の専門家である国際政治分野の先生、加えて日本人の源流を遺伝子の面から研究している人類学分野の先生を招聘し、鼎談を行った。

2023年度活動実績：

第2回：6月17日(土) 14:00~17:00 オンライン併用ハイブリッド開催

モチーフ：「日本文明」の固有性と普遍性 — 「近代文明」の限界を超えて

趣旨・内容：冒頭に三講師から専門分野における日本についての分析が披露された。

斎藤先生は、DNA分析による日本列島人の系統と朝鮮半島の人たちの近縁関係、ヤマト人に存在する二重構造。三牧先生から、国際政治における欧米とグローバルサウスの対立軸の中での日本、核抑止論と核廃絶論の対立軸の中での被爆国日本、そのアイデンティティの確立の重要性。末木先生は、王権(政治世界)と神仏(精神世界)、武士(武力装置)と朝廷(文化装置)の二重構造で保持されてきた伝統的な日本社会が、明治以降に、精神世界の軽視や文化装置の不全により国家の機軸が失われ、日本社会の再構築が待望されているとの発言があった。鼎談では、冒頭発言を踏まえ、生物(人類)進化と人類の平和的共存との関係、国家(領土)を超えた平和的関係構築の糸口の探求などに関して意見が弾んだ。

質疑応答では、ユネスコ憲章の唱える「政治・経済を超える高次の「知的・精神的連帯こそ永続的平和の礎」の実現への道筋や、日本の「近代化」の過程で宗教が社会の上部構造に位置づけられたことによる影響、伝統的宗教観に立ち返った宗教の在り方を通じた日本社会の再構築などについて話が及んだ。

鼎談者：

「宗教哲学」分野 末木 文美士 国際日本文化研究センター名誉教授

「国際政治学」分野 三牧 聖子 同志社大学准教授

「人類生物学」分野 斎藤 成也 国立遺伝学研究所特任教授

参加者：会場参加者26名、オンライン参加者37名、計63名

(3) 「市民懇談 (roundtable)」

「皆が専門家、皆が素人」のキャッチフレーズの下に、文明論的課題を、住民自身が能動的、かつ、主体的に議論し、「新たな文明」の萌芽を探究しようとするものである。討議項目・内容についても、対面参加者の幾人かに話題提起していただき、それを受けて、メンターの指導とモデレーターの進行の下に議論する。

討議に参加される対面参加者は、主に、けいはんな学研都市の市民や立地研究機関・企業の関係者、学生など「meta 鼎談」の招待参加者で、「市民懇談」に先立って開催される「ゲーテの会」や「meta 鼎談」の内容を踏まえて、一定の知見をもって参加していただくこととしている。懇談の様子は zoom ウェビナーにより事前登録者にオンラインで全国配信し、広く視聴して頂いている。

<2023 年度事業の取り組み>

2023 年度の<「新たな文明」の萌芽、探求を！>プロジェクトの統一テーマ「生命論」を踏まえて、モチーフとして『「日本文明」の固有性と普遍性 — 「近代文明」の限界を超えて』を掲げ、対面参加者からの様々な発想を拾いながら懇談を行った。

2023年度活動実績：

第 2 回：7 月 15 日（土）14:00～17:00 オンライン併用ハイブリッド開催

モチーフ：「日本文明」の固有性と普遍性 — 「近代文明」の限界を超えて

趣旨・内容：参加者から KJ 法的手法で関心事を募り、50 件に及ぶ提起案件をカテゴリー化し、①「科学・技術」、②「文化・宗教」、③「戦争・平和」のセッションを設けて、議論を交わした。①「科学・技術」では、日本は事物の固有性、日常生活への有用性の探求に、反して西欧は事物の普遍的法則性の探求に、それぞれ関心が向かう傾向。②「文化・宗教」のセッションでは、国家・社会の統治の形に関する彼我の違いについて、西欧は、神を社会の最上部に据え、反して日本では神仏は伝統的に社会の基底部に置かれ、礼節を尊ぶ「和」の精神を養ってきたが、明治維新を機に欧化思想の下で壊され、その弊害は顕著で「日本文化」・「日本文明」の再興の論点となること。③「戦争・平和」のセッションでは、ユネスコ憲章序文の理念「人の心の中に平和の砦を」が平和の礎となること、支配・服従を超えた「包越の思想」等に話が及んだ。「新たな文明」の萌芽が胚胎する兆しを感じながらの様々な議論が展開された。

参加者：会場参加者 13 名、オンライン参加者 37 名、計 50 名

メンター： 末木 文美士 国際日本文化研究センター名誉教授

モデレーター：本田 隆行 科学コミュニケーター

(4) その他

市民学習サロンは、「満月の夜開くけいはんな哲学カフェ『ゲーテの会』」、「けいはんな meta 鼎談」、「けいはんな市民懇談」などで取り上げられたテーマに関心を寄せる学生・市民有志が、当該テーマ等について、古典、講演録等をテキストとして、さらに深く自主的にゼミナール形式で学習する学びの場を提供するものである。

<2023 年度事業の取り組み>

2023 年度は、「古典（ゲーテ『ファウスト（第 2 部）』）を読む会」が、年 4 回（四半期ごと）計画され、それによって開催された。

2023年度活動実績：

第 1 回：4 月 15 日（土）14:00-17:00 参加者：6 名、はじめに（課題整理）

要旨：ゲーテがファウスト（第 2 部）で取り上げたテーマを要約し、現代社会の抱える問題と照らし合わせながら、今後の会合の視点・論点を整理した。

具体的には、ゲーテの生きた時代を考察し、ゲーテの生涯と時代背景に基づいて、

①時代と精神 ②文明と文化 ③教育と科学 ④主観と客観 などを探求した。

第 2 回：7 月 22 日（土）14:00-17:00 参加者：8 名、テーマ：貨幣発行、産業革命

要旨：「不換紙幣」「産業革命」を取り上げ、①「近代」への展望 ②「紙幣」の誕生 ③「バブル経済」の実態と末路 ④国民国家の形成とその後 などを議論した。また機械論的自然観からの脱却による、⑤「もう一つの科学革命」と国づくりを議論した。

第 3 回 10 月 14 日（土）14:00-17:00 参加者：6 名、テーマ：ホムンクルス

要旨：「ホムンクルス」を取り上げ、①「ホムンクルス」の意義と現在人への警鐘 ②AI（人工知能）と人間（自然知能）の対比 ③「錬金術」と夢（無意識）の評価、その意義 ④近代文明に絡め捕られた人間の解放 などを議論した。

第 4 回 2024 年 1 月 20 日（土）14:00-17:00 参加者：6 名、テーマ：産業革命

要旨：「産業革命」を取り上げ、①産業革命と資本主義の発展の相関 ②少子高齢化が及ぼす経済発展の影響 ③人類誌・文明論的視点から見た産業革命 ④都市化の進展と人々のアイデンティティ ⑤近現在の後を託すべき人間は、などを議論した。

IV ILAS塾「ジュニアセミナー」及び関連事業

2016 年春から、「ゲーテの会」の内容を教材化し、次代を担う 18 歳前後の高校生、大学生のグループ討議を中心としたリベラルアーツの学びの場を提供している。

「ジュニアセミナー」の活動については、持続可能な事業基盤の構築を図るため、三菱みらい育成財団の助成事業に応募、プログラム内容が評価され、2021 年度からの 3 年間の事業助成金を獲得。2023 年度は最終年度で前年度に引き続き当該年度助成金 608 万円を活用して積極的な事業展開を図った。当該助成金を活用して夏季と春季のセミナーを実施し、助成対象の活動である「交流活動の資料公開」と「ホームカミング事業の企画・着手」についても進めてきた。

<事業概況>

2016年3月の初回開催から2019年度末までに8回の開催を重ね、受講生のみならず、教育関係者からも高い評価を得た。また2019 年度から何度か「けいはんな文

化学術教育懇談会」を開催し、当該セミナーの充実を図り、より効果の高い事業展開を狙う観点からの意見集約を図ってきた。しかし新型コロナウイルス拡散予防の観点から、2020年春季・夏季ジュニアセミナーは中止。2021年春季・夏季と2022年春季ジュニアセミナーはオンライン方式により実施し、参加生徒も講師もZoom会議にオンライン参加プログラムとして実施した。オンライン開催の利点である募集対象地域の広がり、従来の京都府、奈良県、大阪府、滋賀県からの参加に加え、北海道、岩手県、長野県、東京都、神奈川県、兵庫県、和歌山県からの参加者を得ることができた。順次、埼玉県、富山県、島根県、愛媛県、福岡県、宮崎県などへと参加地域に広がりが見られている。2023年度は5月のコロナの5類感染症移行に伴い、外部ホテルの個室利用することなく、高等研宿泊施設での合宿を復活させることができ、文字通り寝食を共にして学ぶ機会が提供できた。

2023年度活動実績

(1) 2023年夏季ジュニアセミナー ―課題探究型―

通算 14 回目の開催。これまでの京都、大阪、奈良、兵庫などに加え、新たに和歌山のほか岐阜、広島からも計 16 名の応募があり、全員が参加し、3 つのグループに分かれて討議した。

2019 年夏季以来の 4 年ぶりの高等研宿泊施設を利用した合宿方式で、8 月 2 日（水）～4 日（金）2 泊 3 日で実施。

基本テーマ：生命観・死生観を考える

～科学技術の発展の下での人間の在り方を問う～

セミナーの内容は以下のとおり。

① 哲学・思想分野：「生命とは何か。自然観・生命観、彼我の違いと変遷」

（鈴木 晶子先生・京都大学名誉教授）

冒頭のショートレクチャーでは、「祈り」の意義に触れ、近時、時間と空間に限定された掛替えのない命（いのち）の厳粛性への自覚が希薄化しているとの指摘とともに、①問いを発することの意義に触れて、答えの有る問いと答えの無い問い、言葉に出来る答えと出来ない答え、つまり分別の世界と無分別の世界があることへの自覚が大切であること。②知ることの意義に触れて、経験知の多寡は本質的問題ではなく、それを意味付ける思考のフレームこそが肝要である。「知の欲望」は、「知の権力」へと容易に転化する。「知」に光と影があることへの自覚が大切である。③数える（カウントする）ことの意味に触れ、生命（いのち）の固有性を捨象し、それを普遍的数値に還元することの危険性（例えば、ヒトラーの設置したガス室の意味を想起）に思いを致すことが大切である、などのコメントがあった。

そうした論点を踏まえて、グループ討議では、自然と人間、環境と文化、生命、AI と多岐にわたる議論となった。環境破壊の事象に関連し、自然と人間の関係が対立的関係に陥っている要因に宗教観が関連しているのではないかと、また、社会的同調圧力の強い日本と、自己主張の強い欧米との違いに、言語論にその因を求め、主語があいまいな日本語と主語が明確な英語との違いに着目した議論もみられた。さらに、人間と動物の関係にしても、その飼育に当たって支配・従属関係を構築しようとする欧米と、日本では動物に限らず物に対してさえ親密な感情

を抱こうとするところに特徴があるとの意見もあり、「AI」、「人間」そして「生命」を巡って、その探究が続いた。

② 科学・技術分野：『感染症に向き合った日本人、偉大な先人、二人の軌跡』

(その1)「天然痘に挑んだ緒方洪庵」(木下 タロウ先生・大阪大学特任教授)

冒頭のショートレクチャーでは、緒方洪庵の事績とその志についての解説。洪庵の私塾「適塾」が輩出した人物は、福沢諭吉、長与専斎、大村益次郎などがおり、医学界に止まらず教育界、行政界、政界などにおいて、明治期の日本の近代化に貢献した傑出した人物を次々と輩出した。そこで行われた教育・学習の特色は、原書講読を主とする「適塾式会読(塾生相互教育)」であり、また、二大事績①コレラ対策、②天然痘予防についての実践家としての洪庵の顕著な功績も。その背後には四書五経などの漢籍の素養があったこと、そして洪庵の胸の中には「医の世に生活するは人のためのみ。己がためにあらず・・・」などの志があったと解説。

それを受けてのグループ討議では、洪庵の生き様に照らし、人の「生と死」の意味に思いをはせつつ、生きる意味や価値を「世のため人のため」、或いは「自身のため」の何れに見出すかは、モチベーションのありかの問題でもあるのではないか。などの意見が交わされた。

③ 科学・技術分野：『感染症に向き合った日本人、偉大な先人、二人の軌跡』

(その2)「病を未発に防ぐ」予防医学を目指した北里柴三郎

(森 孝之先生・北里柴三郎記念室臨時職員)

冒頭のショートレクチャーでは、北里柴三郎の信念「近代国家造りには国力増強と衛生観念の周知徹底が重要である」が如何に具現化されたかについて、治療法関係(破傷風、血清療法、ペスト)とともに公衆衛生関係(環境衛生、伝染予防法、防疫体制)に関して顕著な功績があったとの説明。また「医」の使命を論じた『医道論』を若くして著し医学界の奮起を促すとともに「治療医学」にと止まらず、学問体系としての「予防医学」の確立に尽力したのは出色。そのモチベーションの背景には、横井小楠(熊本藩士)の影響があって「知識の実践」への強い思いがあったのではないかと説明。

それを受けてのグループ討議では、現代における「健康観」「病観」などについて意見交換するとともに、「東洋医学」と西洋医学」の異同と評価に関して、宗教観・人間観の影響が見られるなどの議論が交わされた。

④ 体験学習(心身の学)：「武道を通じて体得する「もう一つの知、身体知」

—生命活動における客観知と主観知に触れて—

(藤原 広臨先生・京都大学大学院医学研究科講師)

今回、新たな試みとして設けた分野。冒頭のショートレクチャーでは、「発達症」(自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症)の事例を取り上げ、そこに見られる①完璧主義・こだわり②過集中③行動力・勤などの特徴には、スポーツに限らず社会的にも積極的な意味がある。また、「武道」に求められる「不動心」「無

心」は、部分に拘泥せず全体を俯瞰する心の構えを言う。「心身一如」の世界である。また、「武道」において重要視されることに「呼吸」がある。「呼吸」は自律神経と体性神経の二重の制御の下にあり、自らの意思で「呼吸（心）」を整えることが可能となる。更に、受講生の質問にも応えて、「武道」の神髄は、勝負を競う「競技スポーツ」と異なり、精神を養うところにあるなどの説明があった。

ショートレクチャーの後、藤原先生の指導の下に、受講生全員が正座し「丹田呼吸」を体験、また、呼吸を基礎とした「竹刀」の素振りを体験。新鮮な思いで「身体知」の意義を確認し合った。

(2) 2024 年春季ジュニアセミナー ―人物学習型―

11 月から参加者募集を開始し、12 名が参加。参加校は 9 校（内新規 4 校）で、新たに長崎、熊本からも参加を得た。

セミナーの内容は以下のとおり。

① 思想・文学分野：本居宣長に学ぶ

～「もののあはれを知る」と「漢意」、その多義性と先駆性～

(田中 康二先生・皇學館大学文学部教授)

冒頭のショートレクチャーでは、スライドを投影され「人の心」に関わることは、科学・技術と異なり進歩史観に馴染まない。「大和心」は本来、平和的な概念であるなど、日本人の心性にも触れながら解説。

その後各グループに分かれ TA のサポートの下に討議。①「大和心」「大和魂」の歴史的意味の変容、つまり、単に「魂」あるいは「人間力」を指すものから、対外的敵愾心を込めた言葉として用いられるようになったこと。②歴史を見通す視座としての「進化」と「革命」に触れて、前者は過去から学ぶ視線であり、後者は、未来から学ぶ視線（SF 的発想）である、などについて意見が弾んだ。

② 政治・経済分野：大河内正敏に学ぶ

～「科学主義工業」こそ、産学連携「理研モデル」の核心～

(齋藤 憲(さとし)先生・専修大学名誉教授)

冒頭のショートレクチャーでは、メモを配布され、起業家精神の育成に関して、シュンペーターが提唱した企業家（起業家）精神にも触れ、そこあるのは根性論的「勇敢」さでなく、先ずは用意周到な環境調査を行い無知の既知化を図る必要がある。②科学技術の健全な発展に関し、科学・技術の細分化の功罪に触れながら、科学・技術の発展の背景には「国家」と「軍事」があることを踏まえておく必要がある、との解説。

その後各グループに分かれ討議。有効なプロジェクト創出に当たっては、理想的社会像を掲げ、かつ、アイデアとその具現化のための技術が結合されることが不可欠である、といった意見も出た。

③ 「科学・技術」分野：梅棹忠夫に学ぶ

～「文明論」的視点をもって考える。「旅」はその基盤～

(小長谷 有紀先生・国立民族学博物館名誉教授)

冒頭のショートレクチャーでは、口頭での説明とスライドでの説明で、梅棹忠夫の特性にも触れながら、創造力は異質なものを繋ぐ想像力が不可欠、未来を見通す力は、頭脳を柔軟に保ち多くの人々と対話を重ねることで養われるとの解説。続いて予め受講生から寄せられた質問事項に答える形で、①梅棹忠夫の学問論に関しては、そこには、プラグマティズムでなく「人類の栄光」を求めてとの観念がある。②「文明の生態史観」と「世界システム論」に関し、前者の梅棹忠夫の考えには、後者のウォーラスティンの考えのように資本主義世界を論じたものではなく、単に、史観を地図化したものに過ぎない、との解説。また、梅棹忠夫のノート、京大式カードなどの現物を回覧してのご紹介。

その後各グループに分かれて討議。「旅」の意義などとともに、梅棹忠夫の学問論（人類の栄光）に関し、人類の特徴は好奇心にあり、学問はその好奇心ファーストの発露である。その結果については、原子力問題など「業」とも言えるものを背負っているとの認識があったと小長谷先生のコメントもあり、話が弾んだ。

④ 体験学習（心身の学）：「茶道を通じて体得する「もう一つの知、身体知」

（講話／解説：泉本 宗玄先生・裏千家 今日庵 業躰 教授）

（お点前指導：本間 宗壽先生・裏千家正教授名誉師範）

高等研究所の茶室「雅松庵」（1993 年裏千家より寄贈）の小間のにじり口から入室し、全員が 8 畳広間のぐるりに着座。泉本先生から茶道の歴史、作法などについてご講話を聴きながら、本間宗壽先生のご指導の下に、扇子の使い方などの礼儀作法やお点前を体験。お茶会で大切にされていること（一期一会、一座建立）を体感することができた。

（3）三菱みらい育成財団からの助成関連

三菱みらい育成財団に 2021 年度から助成対象として採択されており、2023 年度が 3 年目の最終年度。当初はオンライン開催での申請のところ、4 月に対面開催への方針変更に伴って計画変更申請をし、受理された。2022 年は大型（75 インチ、65 インチ 2 台）のモニター購入への助成（計 200 万円強）を受けたが、2023 年度からはこのような高価な（助成金全体の中で比率が高い）機器・設備の購入は NG との指導があり、もっぱら運営費に関して助成を受けた。

（4）関連事業「交流活動の資料公開」

三菱みらい育成財団の助成を受け、これまでの交流活動の資料：IIAS ゲーテの会ブックレット、IIAS 塾ジュニアセミナーテキスト（両者で約 90 件）を 2023 年 12 月 15 日から順次公開を始めた。狙いは高等研に蓄積された知見を広く一般に公開することで、公益活動に寄与し、ゲーテの会やジュニアセミナー参加者にも継続的な学びを提供するもの。2024 年 3 月 31 日までに、ゲーテの会ブックレット 31 件、ジュニアセミナーテキスト 18 件を公開した。3 月は、サイト訪問者数：74 名、ページビュー：4399 件だったが、一般の方々向けへの衆知が課題。

(5) 関連事業「ホームカミング事業」

ホームカミング事業は、受講経験者やTA（ティーチングアシスタント）同志が交流する機会を設け、改めて継続的な学びへのきっかけとなることを狙う。

（当該事業も三菱みらい育成財団の助成対象事業）

2022年度の第1回ホームカミングは、以下の要領で開催。

第1回ホームカミング

日時：2022年9月17日（土）14:00～17:30

講演者：京都大学大学院総合生存学館館長 積山 薫 教授

テーマ『いま、日本人の幸福について考える』

開催形態：対面（リアル）開催、高等研コミュニティホールにて

参加者：18名（13名+TA経験者2名+特任研究員3名）

その後、複数回の企画会議を経て、2023年度の第2回は、講演者を招かずに、過去のジュニアセミナーテキストを題材として、十分な討議の時間を設け、以下の要領で開催した。

第2回ホームカミング

日時：2023年8月26日（土）10:00～18:00

テーマ：「夏目漱石に学ぶ～西欧の模倣（外発的開化）を脱し、主体の確立（内発的開化）を～」*

(*2015年6月4日 第23回ゲートの会：佐伯 啓思講師の講演資料を、2016年春第1回ジュニアセミナーのテキストとしたもの。)

内容：グループ毎の討議や全体での意見交換

開催形態：対面（リアル）開催、高等研コミュニティホールにて

参加者：12名（9名+特任研究員3名：運営メンバー）

討議・意見交換

A班の議論：「理想を持たない日本人」 模倣は必ずしも悪くないし、そのための能力も必要。日本人の自我（自己）とは？ 主体性とは？ を議論する中で、漱石は その主体性をあまり出さないような風潮に関して憤りを感じていたのではないか？

B班の議論：「日本人とは幻想（*illusination）である。」主体的に「私たちはこうありたい。」だけでなく、受動的に「日本人はこうあるべきだ」に囚われているのでは？（その振る舞いを再生産してしまっていないか・・・？）

参加者の感想はジュニアセミナーを受講した頃よりも議論の幅が広がり、深い議論ができた、改めて自分の特殊性に気付いた、このメンバーは自分の意見をしっかりと受けとめてくれる、など。このホームカミングという場の受容性の高さを感じとられた様子。

その後、反省会（9月）や企画会議（12月）を経て、2024年度の第3回は2025年2月下旬に開催を目論む。

*illusination：（illusion +imagination の造語）

以上